

2023年3月の総評に代えて 高橋修宏

窓際で呼ぶねこ来るねこ眠るひと (ベロニカ 神奈川県)

ひらがな表記による「ねこ」のリフレインと「ひと」が、どこか長閑な気配を運んでくる。ここでは、「ねこ」も「ひと」も同じように生命あるもの同士として対等に存在しているようだ。いいですね、こんな世界。

コンビニは常に明るい敗戦日 (長谷川柊香 宮城県)

この「敗戦日」は、8月15日のような歴史的に特定された日付ではないはずだ。そのことを「常に明るい」というアイロニーめいた表現が示唆している。むしろ、私たちが日常の中で何度でも出会ってしまう「敗戦日」の気分なのだろう。

段ボール (桜咲 千葉県)

開ければ春の  
五感一式

「段ボール」という見慣れたモノ。その中に「春」が、すっかり取まってしまっているのだろうか。「五感一式」という妙な表現も効いている。

よく知る町の  
知らない道を歩く (佐々木佑輔 埼玉県)

やはり、萩原朔太郎の〈猫町〉を思い出す。このような経験は、誰でも、どこかでしているのではなかろうか。よく知っているはずの町が、どこか新鮮に見えてくるとき、ささやかなポエジーが胚胎されるのかもしれない。

ピアノ線ひとつで人はこのとおり (松下誠一 東京都)

かつて、ピアノ線を巧妙にを使って殺人を犯すサスペンス映画を見たことがある。一読、そのときの映像を思い浮かべた。「このとおり」の一語が不穏な、怖い一句。

桜降る はなびらが降る (豊富瑞歩 茨城県)

はなびらの速さに

逃げ切れなくて

はなびら

「はなびら」の3回にわたるリフレイン。この「はなびら」は、各行ごとにズレを孕みながら、時間の比喩となっているのではないか。4行目の「はなびら」が、あえかな自画像のようでもあり、切なくも、美しい。

白浪の晴れてことばの日本海 (中矢温 東京都)

海の実景のようでありながら、「ことば」の一語によって仮構された(バーチャルな)「日本海」を引き寄せる。言葉による「ことば」の一句か。

春の海一人のための降車ボタン (奎いう子 佐賀県)

かつて能登半島を一人で旅したとき、こんなシーンに出会ったことがある。バスから一人降りると、そこは一面に広がっている日本海。いつまでも、その光景は、私にとって〈永遠〉と呼べるものだ。

川の字になって仲良く心中す (松の梢 大阪府)

一般的に「川の字」とは、親兄弟がいっしょに寝るときに使われる月並な比喩。しかし、こ

ここでは結句が「心中す」だ。親密さを表す「川の字」が、そのまま痛ましさへと鮮烈に転じられている。

芒野にひとつ EXIT の扉

(玻璃 愛媛県)

何より、「EXIT」の表記が洒落ている。また、どこか異界への通路があるような「芒野」の妖しいイメージも呼びこんだ一句。

春が来て家が一軒なくなった

(つけ麺 千葉県)

やはり春は、明るさばかりではなく、どこか退廃や亡びの気配を秘めた季節。著名な俳句〈春の家裏から押せば倒れけり〉(和田悟朗)を想起させる作だ。現代における少子化や人口減少に伴うイメージも感じさせる。

ぼくたちは

(汐見りら 東京都)

落下しながら探してる

一番星になれる夜空を

もしも、広大な宇宙空間で放り出されたら、一体どうなるのか？そんな素朴な疑問に対する、ひとつの明るく、切ない応答のようだ。この作の主体は、すでに半ば星になっているのだろうか。

ねむくない

(花やしき 東京都)

ぐずぐずこども

よのなかの

ひとのひとりのさみしさをしる

すべて、ひらがな表記にしたのが効果的。ぐずる「こども」の心情に寄りそのような作だ。

きっと「こども」は、オトナが思う以上に、自らの存在の孤独を、直観的にわかっているのかもしれない。

冬波にかえすあなたの貝ボタン (有野水都 東京都)

かつて貝であったボタンを、ふたたび冬の海へ返すという振るまいが印象的だ。もし、この「あなた」が死者であるならば、なおさら悲しく、かつ美しく響く。

蛇のようにやさしい (森榮太 東京都)

おまえの首筋が

海に絡むのをここからみてる

どこか、「首筋」と「海」の主客が反転していくような面白さ、不思議さがある。そのため「首筋」が、とても巨大なものとして現前<sup>プレゼンス</sup>する錯覚に捉われるようだ。

また僕が夢で死んだと母さんが (サトヤマキュー 鹿児島県)

りんごの皮を剥きつつ話す

フロイトの俗流解釈によれば、「夢」とはその人の予見や願望が現われると言われる。この作が、あぶり出しているのは「母」に潜在する下意識だろうか。二行目への飛躍も巧みだ。

\*

とりわけ今月は、十代の作者による鮮烈な作品が印象的でした。これからも、たゆまず書きつづけてください。